

グランドセイコーが刻む

「時のモノ語り」 第五回



夢追い人の「パリ時間」

作家 矢島裕紀彦

初夏のパリに若葉色の風がほのかに香っていた。ここには「パリ時間」というのがあるんです。

新進のデザイナーはいたずらっぽく頬笑んだ。夜七時に夕食会に招かれて、七時に行ってしまったら野暮になる。皆がぼちぼち集まりだすのは七時十五分過ぎです。フランス人の自由で小粋な感覚にもつながっているのですが、僕の感性は安易にそこに流されないようにしてきましたね。

勤めていた服飾メーカーを退職して渡仏したのは二十八歳のときです。出発前、少し背伸びしてこの腕時計を買いました。何か心の拠り所のようなものが欲しかったんです。精度が良いことはもちろん、陰影が生かされている針や文字盤のデザインがいい。日本人は昔から、移ろいゆく光と影を屏風や障子などの美しさにとりこんできた。この時計にも、そんな日本の伝統美が息づいています。僕も自分の血の中にあるニッポン人の感覚を引き出して、このパリで独自のデザインをつくり出したいと思っていた。画家の藤田嗣治がそうであったようにね。最初は洋裁学校に通いながら、道端でデザイン画を売りましたよ。偶然その画に